

コレクション『江口文庫』について

経済学部教授 森 久男

2003年9月26日、本学法学部の故江口圭一名誉教授が逝去された。江口教授はそのわずか半年前に本学を定年退職されたばかりで、その早すぎる訃報を耳にした時には、なにかの間違いではないのかという気がして、とても意外の念に打たれた。11月30日、本学名古屋（三好）校舎で74名の教職員・院生・学生等が参加して江口圭一先生を偲ぶ会が開かれた。この追悼会の席上、江口都夫人の挨拶があり、故人の生前の研究生生活の一端が紹介された。

江口夫人の発言の中で、江口教授の古書蒐集癖に関する興味深い一節があった。すなわち、家族にとっては迷惑な話であるが、しばしば古書店から段ボール箱に入った書籍類がいきなり送られてきて、その金額を尋ねると、「百万円」とか、「百五十万円」という答えが平然と帰ってきたそうである。江口家の建物はかなり大きなものであるにもかかわらず、家の中は書物であふれかえっていたとのことである。

年末、江口教授の遺族から同氏の蔵書を愛知大学に寄贈したいとの意向がもたらされた。のち、様々な紆余曲折があったものの、翌年これらの蔵書はすべて本学豊橋校舎の図書館で整理・所蔵することになった。江口教授の蔵書は龐大で、豊橋図書館に運び込まれたのは、正規に刊行された図書資料の他に、古書店で蒐集した各種の雑多な資料、他の研究者から寄贈された抜き刷り、コピー、講義ノート、メモ等が含まれている。講義ノートやメモ類に目を通すと、江口氏の学問研究の方法が手に取るように分かって、きわめて興味深い。

江口教授はクラシックを中心とした音楽鑑賞にも造詣が深く、遺族から龐大なレコード類も寄贈の意向が表明されたが、さすがにレコードは図書館の所蔵対象ではないので、遠慮したとのことである。

江口教授の大学院生時代における修士論文の研究テーマは、大恐慌期の都市小ブルジョアジーに関するもので、営業税反対運動 排外主義といった風に研究内容が推移し、『都市小ブルジョア運動史の研究』（未来社、1976年）で研究成果が集大成され、1976年以降は日本帝国主義史研究へと研究テーマが移っている。

こうした、テーマ変更の転機となったのは岩波講座への寄稿であり、1971年に『岩波講座世界歴史』で「日本帝国主義の侵略」を執筆したのを皮切りとして、1976年に『岩波講座日本歴史』で「日中戦争の全面化」を、1992年に『岩波講座近代日本と植民地』で「帝国日本の東アジア支配」を、1994年に『岩波講座日本通史』で「通史 一九一〇 - 三〇年代の日本」を次々と発表されている。ちなみに、筆者も『岩波講座近代日本と植民地』で「関東軍の内蒙工作と蒙疆政権の成立」を寄稿しており、研究手法はまったく対照的であるが、本学では江口教授と研究領域がもっとも近かったと言える。

この間、1986年に『十五年戦争小史』が青木書店から出版され、いわゆる「十五年戦争」論の主唱者として著名となり、その問題意識を発展させて、1998年に『日本帝国主義史研究』が青木書店から、2001年に『十五年戦争研究史論』が校倉書房から出版されている。

このほか、各論として、『資料日中戦争期阿片政策 蒙疆政権資料を中心に』（1985年、岩波書店）『日中アヘン戦争』（岩波新書、1988年）『証言・日中アヘン戦争』（岩波ブックレット、1991年）が刊行されている。江口教授による日本の植民地・占領地域における阿片政策研究は、つねに引用される先行研究と言える。

以上の簡単な研究業績の紹介からも明らかのように、江口教授は典型的な「講座派」の岩波文化人で、岩波講座で各種の通史を担当される中で、みずからの学風を作り上げてこられたことが分かる。これが江口教授の幅広い関心領域の広がりや形成すると同時に、この学風が蔵書の数量のみならず、幅の広さによく反映されている。

筆者は江口文庫の整理をすすめる最中、その分量のあまりの多さにいささか辟易とさせられもしたが、収穫も大きなものであった。江口文庫の中の図書資料も見事なもので、とくに軍事関係書籍が纏まったコレクションになっている。しかし、一般に公刊された図書資料は他の図書館でも閲覧できるので、ここでは埃が厚く堆積した各種の雑多な手記・報告書・内部刊行物・行政執務書類等について紹介することにしよう。

江口教授の収集資料の中で、分量的にかなり多いのが外務省所蔵資料である。外務省資料は戦後の混乱期にかなりの資料が焼却されたり、破棄されたりしたと言われている。江口教授の収集された外務省資料には、役所内部の執務資料や一部が焼け焦げた報告書が含まれており、その出所が廃物として処分された資料が古書市場に流出したものであることが分かる。分量として多いのは、戦時期の世界各国の経済・政治・軍事情報の調査報告書で、中国関係の報告書もかなり含まれている。また、国際外交協会のような外務省の外郭団体が発行したパンフレット類もかなりの分量である。

外務省資料に次いで多いのは、軍事関係の

内部資料である。中でも珍品と言えるのは、『満州事变史』（第一輯、第一輯附録、第三輯、第六輯、第六輯附録）『陸軍実役停年名簿』（大正5年、昭和2年、昭和10年）『占領地統治及戦後建設史草稿』（総力戦研究所、昭和17年）陸軍パンフレットの各シリーズ等々である。日中戦争の裏面史において、支那派遣軍で通信傍受・暗号解読を担当した栄部隊が活躍しているが、江口文庫には、1937～1940年の外国語放送の傍受記録である『各国宣伝放送』『哈府露語放送』『同盟来電（不発表）』『漢口UP・漢口ロイテル』『漢口日本語放送』等が残されている。このほか、個々の陸軍軍人が残した軍内教育資料、某軍医の龐大な日記・メモ類、盧溝橋事件の体験記等がある。

江口文庫を有名にしたのは、すでに紹介した『資料日中戦争期阿片政策』で利用されている『沼野英不二収蔵資料』（蒙古連合自治政府経済部次長沼野英不二の旧蔵資料）である。同書で収録されているのは、「阿片二関スル調査書類」というファイルを中心として、蒙疆阿片に関係する他の内部資料が一部追加されている。沼野資料には阿片以外に、財政・貿易・外国為替・金融・物価等の資料がかなり保存されているが、多くの行政執務用の統計表が生そのまま残されていて、かなり読み込むのが難しいせいか、江口教授はほとんど利用していない。

このほか、阿片資料として、満州国・蒙疆政権・海南島等で阿片政策の実務に携わっていた及川勝三氏が江口氏に寄贈した報告書類が数点残されており、分量はさほど多くはないが、貴重な内容が含まれている。

江口資料の整理で閉口させられたのは、細かいパンフレット類が玉石混淆の状態で無数に残されていたことである。この短い文章ではその内容を詳しく紹介できないが、関心のある人は書庫に入って自分の目で確認して頂きたい。